
幸せなんて忘れた

和みなり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せなんて忘れた

【Nコード】

N5437K

【作者名】

和みなり

【あらすじ】

幸せを忘れた。非日常的なことを過ごすことになってそう思う。だから幸せなんていらぬ。彼女はそう決意して願う。力が欲しいと。

第一話・ただのおはなし（前書き）

しがない文章ですがよろしくお願ひします

第一話：ただのおはなし

「われらの主を見つけました」

「何？」

「本当か？」

「それは有難い」

「下は暴動を起こそうとしていたみたいですからね」

「幹部たちは自分の私欲のために支離滅裂なことをしている。それを踏まえれば暴動を起こしたい気持ちも分からなくはないけどね」

「まあ、それは私たちにも言えることなんだけどね…」

「ああ、だから私たちは主を探すことにした」

「この組織を作った人だ。必ず私達の活躍のことも知っているだろう。必ず引き受けてくれるはずだ」

「そう、信じてね…」

しばらくの沈黙のあと真っ黒の背景に明るさを出すようにだれかが発言をする。

「計画はそれぞれの段階まで準備できていますか？」

「イチ、20%ぐらいだ」

「二、ハチワリハススンデル」

「ヨン、50%」

「ゴ、同じく50%」

「ロク、四割です」

「ナナ、30%程」

「イチ、君は少々遅れてるようだけど大丈夫かな？」

「問題ない。少々サボっていただけだ。休みは久しぶりなのでね。」

「それよりサン、君の準備はどうなんだい？」

「私はいたって順調だ。そもそも主を見つけた時点で私の仕事は終

わったようなもの。案ずることはない」

「ナナ、君はどうなんだい？」

「すでに入学手続きは済んでいる。問題ない。」

「学校生活はちゃんと過ごせるのかな？」

「そうだね、心配だね」

「風の噂に聞けばナナはアブナイ御方で有名だそうだね。そんな人が普通の生活を過ごせるのかな？」

「ソレハウナズケルナ」

「うんうん」

その他のメンバーも賛同する。

「アブナイ御方、というのはあなた達にも言えることだと思つのですが、まあ、いいでしょう。一か月程度の学務など容易くこなせます。ですので大丈夫です」

「本人がそう言うのなら口出しはしないでおきましょう」

「はいはい」

「さて、これにて今回の会議を終了しよう」

「乙」「乙」「乙」「乙」

真つ黒の背景の中に佇む者はだれもいない。ここはあるチャット場。ある輩しか知らない秘密の場所だ。ここではハンドルネームやIDを必要としていない。必要がないからだ。特殊な端末でしか入ることができないこのチャット場は先ほどまで、他の人の顔も知らない闇の住人たちが話し合っていた場所。故に背景の闇はそこはかとなく深い。

黒変(前書き)

話は進まぬ

黒変

四月も中旬になった。

どの高校でも新しい友達ができ、部活が決まる時期であろう。

ここ、涼平高校も例外ではない。

「綾、部活何入るの？」

この男、名は渡辺秀軌わたなべしゅうきという。まあまあのルックスにまあまあの運動神経を持ち合わせたまあまあモテる男である。

「私はねー、野球部のマネージャー」

この女、名は立守綾たちもりあやという。一言で言い表せば”天然”である。そしてなんととっても可愛い女である。

「お前にマネージャーなんかできるのか？しかも野球部なんて絶対きついで」

「私をなめちゃいけないよ。シュウちゃんの知らない私がまだまだいっぱいいるんだから」

「そうだよ、秀軌。綾はそういう引き出しを使って新たな層を狙おうとしているんだから」

この女、鬼島晶きしまあきらという。姉御肌で格好良く女の子に良くモテる女である。

「綾が黒いキャラになってるよ、晶さん」

「あら、あながち間違いではないでしょう。綾はそういうところも天然だからね」

もうツッコミをするのもめんどい。そう思う秀軌なのであった。

涼平高校は全国的に見てどの面でも平均的な学校だ。ただその平均というものは容易く壊れてしまった。

「動くなッ。」

授業を行っていた各教室に聞きなれない言葉が走る。ドアから発信されたその言葉の発信源は全身黒づくめの人間達。

「今からお前たちは人質となってもらう。おとなしくしていれば何もしないから安心しろ」

その瞬間、悲鳴が各教室で共鳴する。耳に障ってイラつかせる声だ。

だがそれを黙らせる銃声が鳴り響いた。

「黙れ！次に声をあげたものはこの銃の餌食ひたじりとなるぞ」

悲鳴はやんだ。だが生徒や先生の顔からは恐怖は消えない。唯一人を除いて。

大変なことになったな。前もって情報を得ていたとはいえ予定より早かったな。

まあ、弱い傭兵ほど時間を気にしないからな。あ、テロリストか。おっと、そんなことより我が主の身の安全を確保しなければ。主は一階1 Dの教室。

あらかじめ授業を抜けておいた私は今保健室にいる。距離にしておよそ30m。廊下にはテロリスト10名程度つてとこ。こちらの武装は何もないから殺すことはできないけど出し抜くことはできるだろう。

それに援軍も来る予定だ。そこまで持てば大丈夫なはず。やれるで
しょ、と自分に気合いを入れる。
そうして傭兵あがりは今日も道を突き進む。茨の道を。明るく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5437k/>

幸せなんて忘れた

2010年10月9日00時51分発行